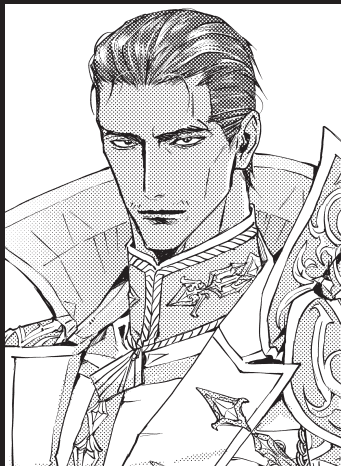


氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける

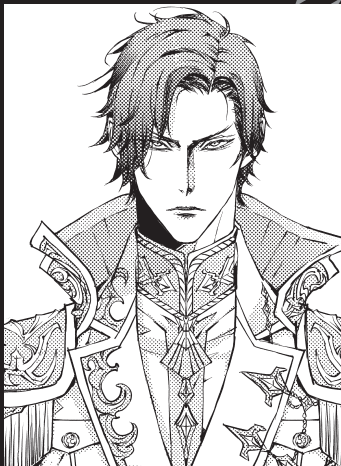
人物紹介

characters



ダリオン・ガウス・オーグスタ

セスやレナードが属する
騎士団団長。
少し説教くさい部分もあるが、
明るくおおらかな性格で部下思い。



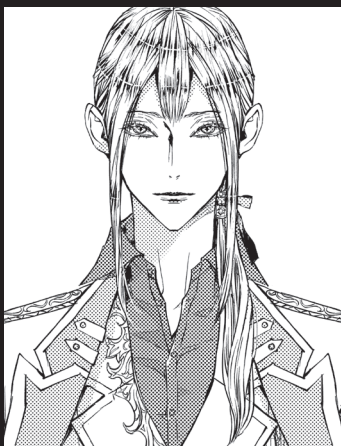
レナード・ヴァン・ウィンラム

伯爵家の次男坊で騎士。
元孤児のくせに
自分よりもいい家柄であり、
能力が高いセスに嫉妬している。



エレーナ

アルナディア王国第三王女。
国では少し疎まれがちな存在だったが、
ハルジに一目惚れされて幸せに。



ハルジ

エルシャルオン王国の王太子。
ノクトをある理由から信頼している。
幼い頃からエレーナを愛し、婚約中。



セス・ヴィラス・リステアード

王宮騎士団員で端正な顔立ち。
孤児ながらもその優秀さを認められ、
侯爵家の養子となる。
幼い頃、魔獣に襲われた際に
ノクトに助けられる。

ノクト・ロラ・シャルダン

数百年に一人現れるという、
膨大な魔力を持った氷の魔術師。
その魔力のせいで周囲から恐れられ、
他人との関わりも薄く、
孤独な日々を過ごす。

目次

氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける

7

番外編 子ども扱いも悪くない セス視点

295

氷の魔術師は王宮騎士の愛に甘く蕩ける

プロローグ

僕が魔力を持たないただの人間だったとしたら、今頃何をして暮らしていただろう。子どもの頃の夢は、騎士になること。世間を知らなかった僕は、努力すれば何にでもなれるという謎の自信があった。だが、大人になればいやでもわかる。この世には、努力だけでは叶えられない夢があるということが。



「やれやれ、今回の是一段とでかいなあ……」
腰まで海水に浸かりながら高く掲げた両手の先に、極彩色の巨大な魚が浮かんでいる。体長は十メートルといったところか。
胴は丸く、大きな尻尾が薄衣うすぎぬのようにゆらゆら揺れるさまは優雅ではあるが、ギョロリとなかば

飛び出した大きな目はちよつと……いや、かなり不気味だ。

また、その魚型魔獣はただ浮いているわけではない。

派手な鱗うろこに覆われた魔獣の体は、透明な立方体の何かに包み込まれている。

非難がましい目で僕を睨にらんでいる魚型の魔獣を閉じ込めているのは、キューブ状の巨大な氷塊だ。これが僕の魔力——氷属性の魔法でつくりあげた氷の檻おりである。

漁場を荒らし、人をも襲うというこの巨大な魚型魔獣に、港町の人々は酷ひどく苦しめられていた。

魔獣が人を捕食せずとも、こんなものが漁場をうろついているのは仕事になるはずもない。そういうわけで魔獣退治の命令が国王より下ったわけだが、只人——魔力を持たない人間たちで構成された討伐隊では対処できなかった。この魔獣があまりに大きすぎたせいだ。

そこで呼ばれたのがこの僕、氷の魔術師ことノクト・ロラ・シャルダンというわけだ。掲げた両手に力を込め、拳を握る。

僕の動作とともに巨大な氷は鈍い音を立てて粉々に砕け散り、中に封じられていた魔獣は黒い煙となって霧散した。

海面に立ち込めていた霧が晴れ、風が戻る。

あとに残ったのはずぶ濡れの僕だけだ。

ついさっきまで大時化だった海が嘘のように、まばゆい太陽が港町を照らしている。

「あれが噂の『氷の魔術師』か……。凄まじいな、あんなでかい魔獣を一瞬で消し飛ばすとは」

「なんという禍々^{まがまが}しさ。あいつが俺たちの敵に回ったら、一瞬でしまいだぞ……」

ざわ、ざわ……と背後でさざめく声が、僕の耳に忍び込んでくる。

僕はそれを聞こえないふりをして、海水を含んで頭に張りついているフードを上げ、濡れそぼった黒髪を手櫛で後ろに流した。

一部の人間が『神の祝福』を受けて魔力に目覚めるように、獣や鳥、魚や昆虫などにも、こうして魔力が宿ることがある。

魔力を得て巨大化した獣たちを、この世界では魔獣と呼ぶ。

おとなしいものもいるが、凶暴化した魔獣は人々に害をなすため、討伐対象となる。

主に魔獣討伐に駆り出されるのは、国王に忠誠を誓った騎士たちだ。

彼らはあらかじめ魔力が流し込まれた武器——魔法具を使って魔獣を倒す。

たいていはそれで片がつくのだが、稀^{まれ}に出現する巨大化した魔獣には歯が立たない。

そういうときに僕の出番がやってくるわけだが、感謝の言葉は聞こえてこない。慣れてはいるが、悲しいものである。

「さて……今日の仕事はこれで終わりか」

濡れたローブを引きずりながら浜に戻ると、兵士たちが一斉に僕から距離を取った。

こういう反応にもはや慣れっこだ。……いや、慣れたと思いたいだけかもしれない。

人々から僕に向けられる視線は、どこからどう見ても好意的なものではない。

好奇もあれば嫌悪もあり、恐怖もあり——彼らの視線は、小さな棘^{とげ}のようにちくちくと僕を刺す。

昔はそういった視線を浴びることが苦痛で常にフードをかぶっていたが、もうやめた。

僕は世のため人のためにこの力を使っている。なのになぜ、僕がこそしなくてはならないのかと開き直るに至った結果、今は堂々と顔を晒^{さら}して歩いている。

といつても、僕は皆に恐れられるような強面^{こわもて}をしているわけではない。

背丈は一七〇センチほどで、瘦身^{そうしん}。足首までを覆うローブに身を包んでいたら、女性と見間違えられるてしまいうような体型だ。

僕に金髪碧眼^{へきがん}の華やかな容姿がそなわっていたならば、ここまで人々から気味悪がられることはなかったかもしれない。

だがあいにく僕は濡れたような黒髪で、瞳は淡い空色だ。

もう何年もともに笑っていないせいで表情筋がすっかり強張^{こわば}ってしまい、気づけば鉄面皮^{てつめんぴ}になってしまった。

どちらかというと童顔に近い顔立ちをしていると思うのだが、表情をうまく作れない。そのせいで、さらに誤解を招きやすくなってしまっている気がする。

砂浜で海水を吸ったローブをしぼっていると、騎乗の指揮官が近づいてきた。

どさりと目の前に落とされたのは、金貨の詰まった布袋だ。

これが僕の働きへの対価である。

「用は済んだらう。ほら、さっさとここから消えてくれ」

馬上から注がれる冷ややかな視線を受け止め、相手を見上げる。

ひととき立派な甲冑^{かっちゅう}に身を包んだ男はびくつと怯^{ひる}んだように一瞬目を瞬^{しん}き、目玉だけ動かして明後日のほうを向いた。

——たまには感謝されたいものだけど、仕方がないか……

思わぬ形で魔力に目覚めてしまった僕は、強制的に魔術師として国に仕えることになった。

だが、仕事を始めてからこっち、誰かに礼を言われたためしはない。

虚^{むな}しいような寂しいような思いを抱えつつ、僕は無言で布袋を拾い上げた。

「言われなくても消えるさ。まあ、困りごとがあればまた呼ぶといい」

返事はなく、指揮官はなおも硬い表情のまま僕の動向を窺^{うかが}っている。

ここはせめて愛想笑いのひとつでも浮かべておくかと思ひ、口の片端を無理やり吊り上げて——

僕は微笑んだ。

すると指揮官は「ヒッ」と妙な声を上げて露骨に顔を強張^{こわば}らせ、馬とともに二、三步後ずさる。

……どうやら愛想笑いは失敗したようだ。

気まづくなった僕は無言でスツと笑顔を引つ込め、兵士たちを刺激しないようにゆつくりとその場を立ち去ろうとした。

すると、背後に群れていた兵士たちがさつと僕を避けて道を開けた。

いきなり目の前にできた道を通らないわけにもいかない。

気まづさを抱えたまま、僕はあえて堂々とした足取りで、大勢の視線を一身に浴びながら馬車のほうへと歩を進めた。

防波堤近くに停められた一台の馬車に乗り込もうとしたそのとき、建物の陰からこのなりゆきを見守っていたらしい街の人々の視線に気がついた。

兵士たちと同様、僕を見る彼らの目にはさまざまな表情が見え隠れしている。

だがひとりだけ、ふくよかな母親の陰から僕を見上げている小さな少年の瞳にだけは、憧れを含んだようなきらめきが見て取れた。

声は聞こえなくても「すごい！」と言いたげにキラキラしている少年の表情を見ると、心が少しあたたまる。

今の僕には、それだけで十分だ。

彼のおかげで、また数か月は生き延びられる。

笑顔を返そうかどうか迷っていると——ぬつと僕の視界を遮って、ふたりの兵士が目の前に立ち塞がった。

草色の質素な兵服に身を包んだこの大柄な男たちは、僕の監視役だ。

そのうちのひとりが、有無を言わせぬ威圧的な眼差^{まざ}しとともにこう言った。

「ノクト様、枷^{かぎ}をお早く」

「……はいはい、わかってるよ」

急かされるままローブのポケットから銀色の腕輪ブレスレットを取り出し、手首に通す。

これは僕の魔力を抑制する枷なまだ。『封魔の腕輪フレシット』と呼ばれている。

魔力を封じる力を持つ特別な金属でつくられたもので、繊細な彫刻の施された美しい逸品だ。

これはもともと、罪を犯した魔術師を捕縛するときに使われていた。魔力をもつて抵抗することを防ぐためにと開発された魔法具である。

咎人とがびとを抑え込むためにつくられたものを、僕は日常的に装備するよう命ぜられている。

万が一、僕が魔力暴走を起こして御者や街の人々を傷つけてしまわないよう、任務のとき以外は必ず装着しておかねばならない。

馬車に乗り込むやいなや、どつとのしかかってくる眠気こげに目を擦りながら、僕は小さな窓からのぞく景色を見るときなく眺めた。

第一章 突然の再会

ここは水の王国、エルシャルオン。

国土の南側には鮮やかな青い海が広がり、王宮の周囲には石造りの端正な街並みが広がっている。人々の移動や物資の輸送のために整備された水路のつくりも美しく、この風景を楽しむために他国の人間がエルシャルオンを訪れるという。水に溢れたこの土地にはその加護も厚く、火や風、大地の魔力よりも多大な恩恵を受けている。

街のそこそこには白亜の石で造られた噴水があり、噴き上がる水が芸術的な軌跡を描く。

夜になると、噴水を囲む魔法石が青や緑の光を淡く放ち、水面みなもに揺れる光がまるで星空のように街を彩る。とても洗練された街だ。

僕の住まいは、街並みの洒脱しやうだつさで有名な城下町からずっと離れた寂しい山間やまあいにある。

国からあてがわれた古い木造の家は酷く狭いけれど、十年住み続けた僕の憩いの場所だ。小屋の前には広い畑があり、そこに菜園を作って暮らしている。

魔獣討伐の依頼さえこなければ、とても静かな暮らしだ。

今日も任務を終えるやいなや、小屋へ連れ戻される。

馬車に並走していた監視役の兵士たちの視線を居心地悪く感じながら、僕は馬車を降りた。

「お疲れ様でした。ノクト様、今夜もおひとりで過ごされるので？」

「……やれやれ、またか。」

慇懃無礼な口調で話しかけてくる兵士の顔をチラリと見やる。

案の定、ふたりの監視役は卑しげな笑みを浮かべながら、僕の全身を眺め回していた。

僕の強さを知らない者はいないため、彼らが僕に手を出してくることはない。

ただ、僕が任務時以外で魔力を使えば厳罰に処されるということも、彼らはよく知っている。

その規制のせいで何を言われても僕が無抵抗だとよく知る彼らは、言葉で僕をからかうのだ。

——まあ、こんな辺鄙な場所でも僕の見張り役だ。暇なのはわかるが、つくづく鬱陶しいな……

僕はため息をつき、「ああ。それがどうした」と短く答えた。

「ひとりの夜はお暇でしょう？ 何をして過ごされるんです？」

「このあいだも、色っぽい声が聞こえてきてましたよねえ。ひとりでどんなお楽しみを？ よろしければ、俺たちが見ていて差し上げましょうか？」

監視兵たちが、いよいよ面倒なことを言いはじめた。

僕は内心舌打ちをして、じろりと男たちを睨めつける。

だが彼らは怯えるどころか「おつ、こつち見た！」「せっかく可愛い顔してんのに、もつたい

ねえよなあ」と好奇に目を輝かせ、さらに卑しげな笑みを浮かべるのだ。

「……うるさい、黙れ。僕に構うな」

それだけを喉の奥から絞り出すように吐き捨てると、僕は小屋の中へ転がり込み、背中ボタンと扉を閉めた。しつかり錠を下ろすことも忘れない。

監視兵たちが僕の声を聞いて何を誤解しているのか知らないが、あれは喘ぎ声ではなく呻き声だ。

この肉体には不相応なほど豊富にある魔力量のせいで、力を使うたびに古傷が酷く痛むのだ。

魔力を封じる腕輪の力を借りて魔力を自由に操れるようになったものの、この痛みだけは消える

気配がない。

しかも、歳を取るごとに悪化している。

そして今日の任務でも、かなりの魔力を使った。

じくじく、じくじく……痛みの気配が近づいているせいで余計気が立ってしまい、ねばっこい視線を僕に投げつけてくる男たちに憎しみさえ感じてしまう。

「……うるさい、黙れ。僕に構うな」

それだけを喉の奥から絞り出すように吐き捨てると、僕は小屋の中へ転がり込み、背中ボタンと扉を閉めた。しつかり錠を下ろすことも忘れない。

監視兵たちが僕の声を聞いて何を誤解しているのか知らないが、あれは喘ぎ声ではなく呻き声だ。

この肉体には不相応なほど豊富にある魔力量のせいで、力を使うたびに古傷が酷く痛むのだ。

魔力を封じる腕輪の力を借りて魔力を自由に操れるようになったものの、この痛みだけは消える

気配がない。

しかも、歳を取るごとに悪化している。

そして今日の任務でも、かなりの魔力を使った。

じくじく、じくじく……痛みの気配が近づいているせいで余計気が立ってしまい、ねばっこい視線を僕に投げつけてくる男たちに憎しみさえ感じてしまう。

「……うるさい、黙れ。僕に構うな」

それだけを喉の奥から絞り出すように吐き捨てると、僕は小屋の中へ転がり込み、背中ボタンと扉を閉めた。しつかり錠を下ろすことも忘れない。

監視兵たちが僕の声を聞いて何を誤解しているのか知らないが、あれは喘ぎ声ではなく呻き声だ。

この肉体には不相応なほど豊富にある魔力量のせいで、力を使うたびに古傷が酷く痛むのだ。

魔力を封じる腕輪の力を借りて魔力を自由に操れるようになったものの、この痛みだけは消える

気配がない。

しかも、歳を取るごとに悪化している。

そして今日の任務でも、かなりの魔力を使った。

じくじく、じくじく……痛みの気配が近づいているせいで余計気が立ってしまい、ねばっこい視線を僕に投げつけてくる男たちに憎しみさえ感じてしまう。

重たい身体を引きずって暖炉に火を起こすと、任務のときに着るように与えられた軍服とローブを脱ぎ捨てた。

下穿き一枚になって橙色の炎が揺らめく暖炉の前で膝を立て、両腕で身体を抱きしめる。そして、鎖骨から胸へと刻まれた四本の大きな傷跡を指先でなぞる。

十五歳の頃、僕は魔獣に襲われた。

それが魔力覚醒のきっかけだった。

エルシャルオンでは、魔力が覚醒した者はすぐに王宮に召されることになっている。

そして王都で教育と訓練を受け、国家に仕える魔術師として働かねばならないのだ。

魔術師になど、僕はなりたくなかった。

けれど、魔力を持つ者は魔術師となり、王家に仕える以外の選択肢はない。従わざるを得なかった。

もし僕が普通の魔術師だったなら、それはそれで幸せだったかもしれない。

この国では、魔力を持つ者は『神の祝福を受けし者』として大事にされる。

高い身分を与えられ、国じゅうの民から敬われる存在となる。

せめて、僕もそっちだったなら……魔術師として生きる日々に、こうもうんざりはしなかったかもしれない。

いくら苦しくても、この力を使うことで誰かが喜んでくれ、僕を褒めて認めてくれるなら、きつ

とこの生活にも耐えられた。

だけど実際は誰も彼もが僕の力を嫌がり、近づいてこようとはしない。

唯一かけられる声も、ああいった手合いのものだけだ。本当にうんざりさせられる。

僕に求められているのは力のみ。

只人では手に追えない危険な魔獣が出現したときにだけ呼ばれる都合のいい存在として、僕は飼いきれにされている。

「はあ……、う……っ……」

少しずつ、痛みの波が迫ってくる。

僕は慌てて立ち上がり、壁に造りつけた薬棚に手を伸ばした。

木棚に並んでいるのは、茶色い小瓶に入った鎮痛薬だ。庭で育てている薬草から自ら調合した水

薬である。

ひんやりした小瓶を握り締めると、少しだけホッとする。

頰れるように暖炉の前に座り込み、僕は水薬を一気におおった。

馴染んだ苦味が口の中に広がり、喉を滑り落ちてゆく。

これを飲んだから痛みがこないというわけではない。

ただ、少し痛みを軽くすることができただけだ。

薬を飲まずに放置すれば痛みのおまり悲鳴を上げて、この狭い小屋の中をのたうち回らなくては

ならない。

痛みで自我を失えば魔力暴走を起こす可能性があるが、任務のとき以外に魔力を使えば厳しい罰が待っている。

かといって、僕を看病する者はいない。

お偉方の一部は僕の力をもっと有効活用したいと考えているようだが、さっさと僕を消してしまいたいと考えている人々のほうが多数なのだろう。

『封魔の腕輪』^{フシマのウデワザ}の着脱が僕の裁量に任されていることをずっと疑問に思っていたけれど、今はその理由がよくわかる。

彼らは、僕を死刑にする理由をつくりたくてたまらないのだ。

僕が魔力暴走を起こして只人^{ただひと}を傷つけたり、兵士のからかいに怒りを爆発させて攻撃を仕掛けるような行為をしてくれたなら、僕を処刑する理由ができる。

僕を消すための大義名分が生まれるというわけだ。

だがわざわざそんなことをしなくても、この禍々^{まがまが}しい氷属性の魔力に肉体がもたず、そのうち僕は死んでしまうだろう。

たったひとりで、孤独の中で僕は死ぬ。

それは決定した未来だ。それがいつになるのかはわからないけれど、そう遠い未来ではないという予感はある。

そうなる前に、会いたい人がいる。

とはいえ、その願いが叶うはずもない。任務のときだけこの小屋を離れることが許される僕には自由がなく、会いたい人に会いに行くことさえ叶わない。

——セス……

血に濡れた僕の手を握る少年の顔を、まぶたの裏に想い描く。

愛らしい顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らし、嗚咽^{おえつ}しながら助けを呼ぶ少年の姿を。

セスは五つ歳^{さい}下で、孤児院^{こにち}でともに育った。

僕にとって、本物の弟のように大切な存在だった。

幼かったあの日、薬草摘みに出かけた僕らは魔獣に襲われた。

そしてそのときに、僕は魔力に目覚めたのだ。

幼いセスを——大切な存在を守ろうとしたそのとき、僕の中に眠る力の種が萌芽^{ほうが}し、爆ぜ^はたのだ。

「……う……はあ、はあつ……」

この力に目覚めてから十年。

あの日以来、セスとは会えていない。

「大丈夫だよ、セス。僕は平気だ……こんな傷、薬を飲めばすぐに治るからね……」

そこにはいないセスの姿を思い描きながら、僕は掠^かれた声でそう呟^{つぶや}く。

孤独と痛みに震える日々を、僕はこうして乗り越えてきた。

懐かしい表情を記憶の中から呼び起こし、僕の手を握るセスの姿を夢想する。

くるりとした大きな目は、色鮮やかな翡翠色だった。

太陽や蝋燭の光を受けてセスの瞳がきらめくたびに、書物でしか見たことのない宝石を手に入れたような気分になった。

二十歳になったセスは今もきつと、キラキラと輝く綺麗な目をしているに違いない。

両目をふちどる長いまつ毛も、耳の下で切り揃えた柔らかい髪の毛も、けぶるような金色だった。セスが身動きするたびにセスの周りの空気がキラキラと輝き、彼がそこにいるだけで僕の毎日は明るくなった。毎日が楽しくて、幸せだった。

活発で負けん気が強く、でも思いやりがあつて優しいセス。

彼が今ここにいて僕の手を握っていてくれたなら、こんな傷の痛みなどあつという間に消えてしまふのに……

「うつ……く……はあ、はあつ……」

だんだん座っていることさえつらくなり、倒れ込むように絨毯の上に横たわる。

裸体をちくちくと刺す硬い絨毯の感触はお世辞にも心地よいとは言えないが、もはやベッドに這い上がることもさへ億劫だった。

ゆっくりと薪を舐めるように大きくなつてゆく炎が、僕の真っ白い肌を赤く照らしている。

重たいまぶたを薄く開いて赤々と燃える暖炉を見つめながら、僕は絨毯の上で胎児のように丸く

なつた。

痛い。

全身がじくじくと疼く。拍動に合わせて少しずつ痛みが激しくなり、僕はさらに小さく身体を丸めて目を閉じた。

魔獣の歯牙で怪我をしてから十年が過ぎた。

それほど長い時間が経っているのに、この痛みはまるで癒える気配がない。

小さく縮こまつたまま、僕は左胸の傷を手のひらで強く押さえた。

薄い筋肉に覆われた胸元に、赤く盛り上がった筋状の傷が四本。

それは、鎖骨から鳩尾のあたりまで長く伸びている。

いまだ生々しくくつきりと浮かび上がった傷は、白い肌の上にあつて酷く醜く、禍々しい。

そして魔力を使ったあとは、傷自体が拍動するかのよう痛みを帯び、毎回僕を苛むのだった。

——会いたいなあ……。セスはどうしてる。どんな大人になっているだろう……

セスの存在が唯一の希望だ。

寒い、痛い、苦しい、つらい。

だけど、僕の手を握ってくれる者は誰もいない。

むなしく伸ばした白い指先のむこうに、橙色の炎が燃えている。

毛布を引っ張って身体に巻きつけると、僕は記憶の中のぬくもりを想いながら目を閉じる。

感觸を伴わない炎のぬくもりを抱きしめながら、四肢を縮めてひとりで眠った。



小屋に戻り、痛みに耐えながら眠ること数日。

自作した鎮痛薬を飲んでこんこんと眠り、ようやく起き上がることができるようになったかと思ったら、王宮への呼び出しを受けた。

—— ったく…… 病み上がりだというのに人づかいの荒い……

王都中央に鎮座する高台、その上に建つエルシャルオンの王宮は、陽光を浴びてひとときまばゆく輝いていた。

壁面は白く、その上には丸みを帯びた青い屋根が美しい。

噴水と水路で飾られた街並みの中心に佇む白亜の王宮の壮麗さもまた、王都の見どころのひとつだ。

ただ、天気がいい日の王宮はあまりにも眩しい。眩しすぎる。

壁も床も白いため、これでもかといわんばかりに太陽の光を反射するのだ。

普段薄暗い小屋で暮らしているせいで、まともに目を開けていられない。

切れ長の目をもっと細くしながら魔術師のイトリーの後ろを歩きつつ目を擦っていると、どんと

何かにぶつかった。

「おっ、おい！ そんなに近づくな！ もっと距離を空けて歩け!!」

「ああ…… はいはい、ごめんごめん」

「まったく！ 気をつけるよなっ!!」

僕にぶつかられたイトリーはおおむねほどに飛び上がり、サッと僕から距離を取った。そして、いまましげな顔で睨みつけてくる。

それもそばかすの散った頬を真っ赤にしつつ顔を歪め、僕に触れたローブをこれ見よがしにさっさと叩きながら、だ。

そういう嫌味つたらしい仕草に苛立つが、僕は無言でイトリーの後頭部を睨みつけるにとどめた。その気になれば、腕輪をしてもイトリーの後頭部に小さなつららをぶつけることなど造作もない。だが、そんなことをしたら処刑されてしまうのでやめておく。

イトリーは僕と同じ二十五歳で、水属性の魔術師—— いわゆる “水の魔術師” だ。

エルシャルオンに生まれる魔術師は、皆が例外なく水属性の魔力を帯びている。

水の動きを操れるため、治水工事の補助にあたったり、水の出ない国に水を運んだり、王宮で祝事があるときは水を噴き上げて場に華を添えたりする。

いかに高く、いかに美しい軌跡で水を噴き上げられるかで能力の優劣が決まるらしい。

平和なものだなど、僕はそれをいつも少し生ぬるく思っていた。

ちなみにイトリーの両親は漁師だ。

幼い頃に魔力に目覚めたイトリーは王宮に召され、両親には国からたくさん金が渡された。彼の両親にとっては自慢の孝行息子だろう。

“水の魔術師”として国に仕えるイトリーは僕と違って里帰りもできるし、王族に次ぐ高い地位をも与えられている。

だから、大きな問題を起こさない限り人生は安泰だ。——不公平すぎて悲しくなってくる。

一方僕のような氷属性の魔術師は、数百年に一度、ここエルシャルオンに突如として現れる稀有な存在である。

ただただ氷属性の魔術師というだけならば、おそらくここまで嫌われはしなかっただろう。

問題なのは、これまでに出現した“氷の魔術師”たちが、もれなく王国に厄災を招いてきたということだ。

残っている記録によれば、初めに“氷の魔術師”が出現したのは三百年前。

当時、この世は大戦の只中だった。

そのときばかりは押し寄せる敵を撃退する武力として“氷の魔術師”は重宝されたようだが、そのやり口があまりに酷かった。

攻め込んだ国を氷漬けにするだけでは飽き足らず、エルシャルオン国内に攻めてきた敵兵を全員凍らせ、亡骸を各国に送り返すという鬼畜ぶりを見せたというのだ。

国内にいる魔術師たちとも力量差がありすぎて、彼を諫めることができる者が誰ひとりいなかったことも仇となった。

結果的にエルシャルオンは他国から莫大な反感を買い、数十年にわたりこの国を孤立させたという……

そしてその次に“氷の魔術師”が出現したのは、今から百二十年ほど前のこと。

当代の“氷の魔術師”は感情的になりやすいたちで、魔力操作が不得手だったらしい。

情緒不安定で、すぐに力ツとなりやすい性格だったその魔術師は、些細なことで魔力暴走を起こしていた。

その結果、常に温暖な気候が売りのエルシャルオンを国ごと寒冷化させて産業に大打撃を与え、その咎を与えようとした王族をはじめ、彼を捕らえようと追ってきた騎士を数十人近く凍死させ、後に肅清を受けた……

そして今代。

“氷の魔術師”として能力を開花させてしまったのが、この僕だ。

現在、世界は各国のバランスが保たれ、泰平といっている時代になっている。

ほんの二十数年前——僕が生まれたばかりの頃は各国の領土争いが激化していて不穏な空気が絶え間なく流れたが、その争いはすでに完結を迎えている。

平和になった今になって僕という危険人物が爆誕してしまい、国としても僕の扱いに困っている

のが現状だ。『生まれる時代を間違えたな』と言われたことは一度や二度ではない。

とはいえ、僕だって人と争うのは好きじゃない、むしろ大嫌いだ。

二十数年前の戦争で家族を失った僕にとって、人と人の争いは最も忌むべきもの。

世界に平和が保たれている今、僕が戦う相手は同じ人間ではなく、魔獣たちだ。

魔獣から平和に暮らす人々を守るためならば、この力を使うことは厭われない。

たとえ、僕の苦しみ気づく人が誰ひとりとしていなかったとしても。

この世界のどこかで暮らすセスを遠くから守っていると思えば——…この孤独にも、耐えている気がする。

「で、次はどんな任務なんだ？　僕が行かないと片付かないような難易度の高い任務なのか？」

「知らないね。僕はお前を連れてこいって言われているだけだ」

「ふうん。ま、君たちの水遊び魔法程度じゃ、魔獣の一匹も討伐できないもんな。おかげで僕は儲かるよ」

「な、なんだと!？」

つい嫌味っぽい口調になってしまった僕に向かって、イトリーがいきりたつ。

だが僕に向き直るや否や、イトリーの奥二重の小さな瞳が怯えたように震えたのがわかった。

もうひとつ僕にとって不幸だったのは、現在エルシャルオンに数百人存在する「水の魔術師」たちと比べて、僕の魔力が恐ろしく強力だということだ。

また、彼らとは比べ物にならないほど魔力量も豊富である。もし僕に宿った氷属性の魔力が些末なものならば、こんな扱いを受けなかったかもしれない。

何十年前、戦時の魔術師たちは、「水の都」として作られた街の構造をうまく活用して水の障壁をつくりあげ、王宮を敵から守ったそうだ。

激しい濁流をつくりあげて攻め寄る敵を押し流すなど、豪快な活躍をしていたという。

だが戦争が終わり、世界に平和が訪れた今、若い「水の魔術師」たちは一気に弱体化した。

そのわりに今も高い身分が与えられているのは、戦時のなごりが今もあるためだ。

中でも特にすぐれた魔術師たちは「近衛魔術師」と呼ばれ、王族らのよき相談相手となっている。王族との距離が近すぎて一部の貴族たちからは煙たがられているという噂も聞こえてくるが——まあ、それは僕に関係のない話である。

「ほら、ここで待ってろ。腕輪、ちゃんとしてるだろうな」

「してるよ、ほら」

腕を持ち上げると、僕の手首で銀色の腕輪が鈍く光る。

「ならいい。じゃ、僕は行く。お前はここを動くなよ」

イトリーは丸い身体をふんぞり返して僕を見下ろし、ぷいっとそのまま行ってしまった。

連れてこられた場所は、青々とした木々に囲まれた庭園の一角だった。

魔獣討伐を主に担う王宮騎士団や、騎士団の下で戦闘任務などに就く兵たちの訓練場からほど近

い場所である。

僕の背丈よりも高い木々が丸く綺麗に剪定され、白亜のタイルが敷き詰められた小径があり、小さな水路と噴水が整然と並んでいる。

目線の先には東屋がある。白い屋根が陽光でまばゆく輝いていた。

——綺麗な庭だ。きつとあの東屋で打ち合わせをするんだろうな。

任務の大きさによって説明にやってくる役人の階級はさまざまだが、皆びくびくしながら僕の様子を窺ってくる場所は共通している。正直やりづらいが仕方がない。

東屋の椅子に腰掛けて役人を待とうと思い、僕はかぶりっぱなしだったフードを上げてゆつくりと小径を歩いた。

ひと気がなく静かな場所だ。さんさんと暖かな陽が差し込む庭園に居心地の良さを感じていたのだが……ふと、庭木の陰からぞろりと現れた数人の兵士の姿を目の当たりにして、僕は内心舌打ちをした。

「おっ、これはこれは。ノクト様じゃないですか」

僕の小屋を見張る監視兵のひとりが、三人の仲間を連れてふらりと現れた。

訓練を終えたばかりなのだろう。質素な訓練着に包まれた筋肉質な身体には汗が浮かんでいる。

——くそ、面倒だな。役人がすぐに来てくれたら、こいつらに絡まれなくてすんだのに……

しかし庭園の入り口のほうを見やるも、人がやってくる気配はない。

イトリーと違い、男たちは怯む様子もなくずかずかと僕に近づいてくる。監視兵の男は、僕がおとなしいことをよく知っているからだろう。

気づけば僕は、頑強な一般兵に取り囲まれてしまっていた。

ぞわ、と全身の肌が一齐に粟立つ。

——落ち着け、大丈夫だ。動揺するな。……こいつらは僕に手を出せないんだ。

「へえ……こいつがそう？ 近くで見るとのははじめてだ。けっこう可愛い顔してんじゃねえか」

見慣れない男のひとりが、わざわざ身を屈めて僕の顔を覗き込んできた。

唐突に距離を詰められ冷や汗が一筋背中を伝うが、僕はふいと視線を逸らして人知れず息を殺す。僕がうつむいている間も、まわりでは男たちが僕を眺め回しながら、浮かれたように言葉を交わしている。

「へへ、そーなんだよ、可愛い顔していらっしやるだろ？ 見張りしてるとき、小屋から夜な夜な色っぽい声が聞こえてくんだよな」

「へえ、そうなんですか。ノクト様、いったいひとりで何をしたらっしやるので？」

「ずっとおひとりじゃ寂しいでしょ？ ……どうですか、今度俺がお相手しますよ？」

「バカかお前。ノクト様に妙なことしたら氷漬けにされちまうぞ！」

男たちはそう言って、がははと可笑しげに笑っている。

僕の力を恐れて触れてこようとはしないが、下品な揶揄を浴びるたびに身が竦む。

……正直言って、怖いのだ。

こういう手合いの男たちが纏う空気によって、忌まわしい記憶が呼び起こされそうになる。

魔術訓練生時代——魔獣に襲われた後、十五歳で王宮に召されたばかりの頃、僕は一度だけ大問題を起こしたことがあった。

怪我で意識を失っているうちに孤児院から王宮へ連れてこられていたこともあり、僕は酷く混乱していた。

嚴重な警戒のもとで治療を受け、身体が動くようになるやいなや、厳しい魔術操作の訓練を課せられた。

孤児院でのこぢんまりとした穏やかな暮らしから強制的に引き離され、見ず知らずの大勢の大人たちに囲まれての訓練生活を強いられた。

その上その大人たちは皆、いつ爆発するかもしれない爆弾を扱うかのように僕に接する。

突然ガラリと環境が変わったことへのストレスと我慢が積もりに積もって、僕は一度だけ酷い魔力暴走を起こしてしまったのだった。

きつかけは些細なことだったと思う。

家柄が良く年齢の近い魔術訓練生に、孤児であることを笑われた。

僕に聞いただけなら何を言われても平気だ。でもその訓練生は、僕が家族のように思っていた孤児仲間たち全員を貶めるような発言をした。

その頃はまだ魔力をコントロールするすが身についていなかった。

怒りによって爆発的に魔力は増幅され、封魔の腕輪は砕け散り——大惨事が起きた。

だが僕は魔力に吞まれてしまっていたため、その瞬間をはつきりとは覚えていない。

ただ記憶にあるのは、魔術訓練生たちの阿鼻叫喚と恐怖の眼差し。

あとから地下牢で聞かされた話によれば、僕は訓練用広場の地下深くに流れる水脈の水をすべて凍らせ、それを地表に呼び寄せて地面を突き破れたということだった。

幸い怪我人はいなかったけれど、広場は無惨な有様だった。

青々とした芝が敷かれて綺麗に整えられていた地面には、小山のような氷塊がいくつも突き出していたという。

それはまるで僕の攻撃性を具現化したように鋭く尖っていたらしい。

氷が溶けて消えたあとも、地面は深い亀裂が入ったり隆起したりとぐちゃぐちゃに荒れ果てたまま。地下水脈を破壊したせいで、延々と水が噴き出している場所もあったという。

そのせいで王宮内にまで泥水がひたひたと侵入し、魔術師仲間のみならず、僕は王族や騎士たちからもひんしゆくを買ってしまった。

その尻拭いをしたのが“水の魔術師”たちだった。

総出で水を止め、水脈の修復にあたり、現状復帰にかかった期間は三か月。

国中でこの一件の噂で持ち切りとなり、僕はエルシャルオンの有名人になった。

ただし、広がったのは悪名のほうで……

そう、僕が嫌われる理由は、過去の「氷の魔術師」たちのせいだけじゃない。

こんな事件を起こしているから、皆が僕を避けるのだ。

僕が皆でも僕を避けたい。怒らせたなら何をしでかすかわからない危険人物に、率先して近づきたいわけがない。

そしてこの事件のあと、僕は魔力を封じる「封魔石」で作られた手枷と足枷で四肢を囚われ、絶するまで激しく鞭打たれた。

ただでさえ魔力を放出したあとは傷の痛みにも苦しまねばならないのに、そこへさらなる激痛が叩きつけられる。

思い出すだけで吐き気がするほど、最悪な時間だった。

粗末な木の台の上に俯せに寝かされ、拘束され、三人の処刑人が代わる代わる僕を鞭打つ。

剥き出しにされた僕の背中に向かって鞭をならせる男たちの顔には恍惚とした興奮が浮かび、下卑た言葉や笑いを浴びせられるたびに心がすくんだ。

痛みよりも処刑人たちの卑しい視線に晒されることが、何よりも屈辱だった。

激痛に耐えきれず涙を流し、許しを乞う僕に嗜虐心をくすぐられたのか、はたまた劣情を刺激されたのか、処刑人たちの股座は大きく膨れ上がっていたのだ。

いつ終わるのかもわからない苦痛。

背中は熱く燃え上がるように痛むのに気を失うこともできない。

どうしてこんな目に遭っているのだろうか、自分の人生を僕は呪った。

ただ、罰の効果は抜群だった。

その日以降、僕は何があっても魔力暴走を起こすまいと心に誓い、魔力制御の修行にこれまで以上に精を出した。ふたたびあんな目に遭うのはまっぴらごめんだ。

あのときは、処刑人とともに監視役の近衛魔術師がいたから最悪の事態は免れたが、もしまた処刑人たちに囲まれるようなことがあったとしたら、おぞましい行為を強いられてしまうかもしれない……その恐怖が、僕の行動を慎重にさせるのだ。

今、僕を囲んでいる兵士たちが纏う粗野な雰囲気。これは、あのときの処刑人たちを否認なしに思い出させる。

魔力を使えばたやすく退けられる相手だが、そうすると僕は極刑を科せられる。

それをこいつらは知っている。だから僕をからかって、反応を見て遊んでいる。

……腹が立ってたまらないのに、どうしようもなくこの手の男たちが恐ろしい。

それが悔しくてたまらなかった。

「あれ？ ノクト様、顔色がお悪いですよ？」

「ははっ、仔ウサギみたく震えてんじゃねえか。こいつ本当に強いのか？」

「ばーか、触ったら凍っちまうぞ！」

「本当かよ。どれどれ、ちょっと試してみるかあ？」

ひととき大柄な男の太い腕が眼前に迫り、視界が氷結するように白く霞んだ。恐怖と嫌悪がないまぜになり、身の危険を感じて防衛本能が燃え上がる。

こうなってしまったときが一番あぶない。

魔力が溢れる。

——っ……いけない、制御が……!!

溢れ出しそうになる力の濁流をなんとか抑え込もうときゅつと目を閉じたとき——……ふわ、と清々しい草原のような香りが、僕の鼻腔を淡くくすぐった。

「この無礼者どもが。ノクト様から離れろ」

「っ……」

陽光を吸って蕩めく金色が、見上げた視界の中でまばゆく輝く。

背の高い男が、僕に向かって伸ばされた太い手首を掴んでいた。

そして、端正な横顔に厳しい表情を浮かべ、兵たちを睨みつけている。

一般兵とは違い華やかな装束を身に纏った若い男を見て、兵たちが揃ってぎよつとしたような顔になる。

「っ……いい、いえ俺たちはただ！ ノクト様の体調が悪そうだったから手を……!」

「嘘をつけ。——汚らわしい」

金髪の男は問答無用とばかりに、兵士の腕をそのまま背中の方へ捻りあげた。

悲鳴を上げながら地面に膝をついた兵士が、「すみません、すみません……っ!! 放して、折れる……っ!!」と脂汗を流しながら苦悶を滲ませている。

だが、金髪の男は冷ややかな目つきで兵士を睥睨したままだ。

周りの兵士たちも、男の凄みに負けて尻込みしているようだった。

「お、折れる、折れるっ……!! やめてください、もう、しませんから……!!」

「しない？ 何をだ」

「ノ、ノクト様に……無礼な態度をとったこと、謝ります、ので……っ……もう放してください……」

「謝罪だけじゃ足りないな。もう二度とノクト様に近づかないと誓え」

「誓います、誓いますから……やめてくださいっ……!!」

「信用できないな」

片手一本で屈強な兵士を屈服させている男は、ぱつと見たところ兵士よりもずっと細身のようだ。だが、押さえるべき急所を掴んだ長い指にこめられた力は容赦がなく、ミシミシと骨が軋む音が僕にまで聞こえてきた。

しかも男の横顔はまるで無表情なままだ。放っておくと何をしかすかわからない不気味さがあり、思わず僕は声を上げていた。

「お、おい……!! もういい!! 放してやれ!!」

咄嗟に声を上げて金髪の男を制すると、翡翠色にきらめく双眸がまっすぐに僕を捉えた。

——え……？

目があった瞬間、ドクン……と心臓が跳ね上がる。

その男の瞳の色、髪の色、そして端整な顔立ちが、僕の記憶を大きく揺さぶった。

「……ノクト様がそうおっしゃるのなら」

兵士たちに向けていた冷酷な目つきが嘘のように、男は砂糖菓子のように甘い笑顔を僕に向けた。その豹変ぶりに少しばかりゾッとする。

男はぱつと兵士の腕から手を離し、僕に見せた笑顔を兵士たちに向けて凄みのある低音の声でこう言った。

「消えろ。後から沙汰が下る。覚悟して待つように」

「つ……失礼します……!!」

腕を折られかけた仲間に肩を貸しながら、兵士たちがバタバタと忙しく消えていく。

すこぶる顔のいい男とふたり、その場に取り残され、僕は恐々とその立ち姿を見つめた。

すらりと立つ姿勢の良さから滲み出るのは、育ちの良さそうな上品な空気だ。

平民出の兵士たちから感じる粗野な雰囲気はまったくなく、身のこなしには隙がない。

一般の兵士たちは草色のズボンとシャツの上に鎖を編んだベストを身につけているのに対し、彼が身に纏っているのは、淡い灰色の詰襟に金色の飾緒のついた軍服だった。

高い襟の緑や袖口には金糸で縫いつけられた飾り。胸元には同じく金色の飾緒。

——この華やかな衣装は、王宮騎士団か……

不意に、金髪の騎士が僕に向き直る。

思わず後ずさった僕に、その男はふわりと柔らかな笑みを浮かべた。

「ノクト様はいいかならず、とてもお優しいですね。あなたが止めてくださらなかったら、あのまま腕を折ってしまうところでした」

「な、なんてことを言うんだ。まあ、間に入ってくれたことには礼を言うが……」

「あの男、数か月前からノクト様のご自宅の見張りに立っていた兵ですね。以前からあなたにあなた調子で？」

「……いや、それは……」

下卑た言葉でからかわれていたこと、それに対して何も言い返せずにいたことを知られるのが恥ずかしくて口籠る。

すると騎士は沈黙からすべてを察したようにひとつ頷き、「なるほど」とだけ口にした。

「ノクト様が彼らに手を出せないと知っていて調子に乗ったのですね。許しがたいことです」

「い、いや、でも……」

あんなやつら、はじめに声をかけられたときに僕がもつとうまくあしらえていたら調子づかせることはなかったはずだ——と、思うところはあるが、うまく言えずにまた口籠る。

すると金髪の騎士は俯いた僕の前にすつと跪き、自らの胸に手を当てた。
澄み渡るように美しい翡翠色の瞳が、まっすぐに僕を捉えている。

ひたむきで熱い視線だ。どうしてそんな目で僕を見るのかとたじろいでいると、金髪きんぱつの騎士は囁くような声でこう言った。

「ノクト様のごことは私がお守りします。どうか、そんなお顔をなさらないで」

「……えっ？ な、何をいきなり……！」

「ようやく、ようやくお会いできたんです。これからはもう、あんな下品な男たちをあなたのそばには近づけない。これからは、私がずっとそばでお支えします」

「……は……？」

それこそ神に祝福されたかのような美しい騎士が、潤んだ瞳で僕を熱く見つめながらそんなことを訴えてくる……

僕は混乱した。混乱するなど言うほうがどうかしている。

触らぬ神にないとやらだ。

なんだかじわじわ怖くなってきた僕は、「いや……大丈夫だ。僕に構わないでくれ」とだけ告げて、さっさとその場から離れようとした。

だが……

「ノクト様。……私を覚えていますか？」

「え？」

「私の名はセス・ヴィラス・リステアード。幼い頃、あなたは私の命を救ってくれた」

「っ……」

その名前を聞いた瞬間、心の奥底に閉じ込めていた遠い記憶が強く揺さぶられた。

ばくばく、ばくばくと心臓が暴れはじめる。

けぶる金色の髪、瞳の色、この顔立ち……

幼い頃に離れ離れになった幼いセスの顔と若い騎士の顔が、目の前でだぶって、重なった。

「セ……セス、なのか……!？」

「ああ、そうだよ。俺だよ、ノクト」

「う、うわ……」

立ち上がったセスは目を細め、蕩けるように甘い笑みを浮かべた。

すっかり背が伸びている。僕より二十センチは背丈がありそうだ。

肩幅も広くなり、胸板も厚い。

華やかな軍服がよく映える逞しい体つきになった。

あまりに立派に成長したセスが眩しく、僕はしばし呆然としてしまった。

「そんな、まさか……こんなところで会えるなんて……」

「よかった。俺のこと、覚えててくれたんだね」

「当たり前だよ！　で、でも、こんなに立派になるとは思わなかったから、誰だかわからなかった……」

「ふふ、そう？　立派になれたかな、俺」

目を細めて微笑むセスの姿がなぜだかすこぶ誇らしく、目が離せない。

——まさか王宮騎士団に入っていたなんて。こんなに近くにいたなんて……！

突然すぎる再会に胸のざわめきが収まらない。

僕はおずおずと手を伸ばし、指先でセスの頬に触れてみた。

幼い頃はふにふにだった柔らかい頬はシャープになり、小さく丸っこかった鼻はすっきりと鼻筋が通っている。

今も綺麗な二重まぶたの双眸には理知的な気品が宿り、騎士ではなく王子様といっても違和感がないほどに美しい。

唇は幼い頃と変わらずほんのりと赤いままだが、下唇がふつくらとして柔らかさそう。それが妙に色っぽく、僕は少しだけどきりとした。

その唇が滑らかに動き、僕にだけ聞こえる声で秘めやかに囁いた。

「会いたかったよ、ノクト。すぐ会いたかった」

「ば、僕も……！　僕も会いたかった。ずっと、セスがどうしてるか気になってたよ」

「本当？　嬉しいな。ここまで努力してきた甲斐があったよ」

——ああ、セスだ。間違いない。大人になったセスが、僕の目の前に……！！

ようやく実感が湧いてきた。

懐かしさと喜びで胸が高鳴り、目の奥がじんと熱くなる。

胸の奥から噴水のように溢れ出す感情をどうすることもできずに僕は思わず、倒れ込むようにセスの身体に抱きついた。

「あつ……。ノ、ノクト？」

「セス。ああ、セス……嬉しいよ。またこうして会えるなんて……！」

昔は僕がセスを受け止めていたけれど、今はすっかり立場が逆になってしまった。

僕を受け止めるセスの胸は逞しく、そっと僕の肩に置かれたセスの手はとても大きい。僕の肩をすっぽり包み込んでしまえるほどになっている。

ドキドキしているのは僕だけではないようだ。

きらびやかな飾りのついた軍服の中ではくぼくと暴れている心臓の音が聞こえてくる。それさえも懐かしくて愛おしくて涙が滲む。

——セスも僕との再会を喜んでくれてるみたいだ。ああ……どうしよう。嬉しすぎて、胸が、苦しい……っ。

どくん、どくん、どくん……心拍数がこれまでにないほど上昇していく。孤独な静けさに慣れた僕の心に久方ぶりに血が巡り、濁流のように感情が掻き乱され、胸の奥か

ら熱いものがとめどなく噴き出すような感覚が僕を包み込んだそのとき……

ビキン!! と冷たく硬質な音があたりに響く。

同時にセスの身体がびくりと強張った。

「つ……!? ノ、ノクトっ……!?」

「……あ、ああっ!？」

セスの背に回していた手から魔力が溢れ出し、ひつつきあつた僕らの身体をひとまとめにして氷の中に閉じ込めてしまっている。

僕らふたりの上半身をがっちりと覆うのは、環状の分厚い氷だ。

突然出現した氷に上半身を囚われてしまったことに驚いたらしく、セスが「うわっ……!」と小さく声を上げた。

——や、やばい……!!

王宮内で魔法を使うなど言語道断。処罰対象になる行為だ。

すぐさま氷を砕こうと意識を集中したが、激しい動揺のせいで力の制御がうまくできない。

それが余計に僕を焦らせる。

「ご、ごめん!! 悪気はないんだ、すぐに解くから……!!」

「つ、冷たい……本当に氷だ。すごいね、ノクト」

「いや、感心してる場合じゃ……!」

セスを抱きしめたまま凍りついている自分の腕をなんとかしようともがきつつ、深呼吸して平静を取り戻そうと頑張っていると……顔のすぐそばで銀色の光がぎらりと閃く。

僕は仰天して、自分で作った氷の戒めの中で思わずセスに抱きついた。

「これはいったいどういうことです? 王宮内で騎士を攻撃するとは」

若い男の声が威圧的に響き渡る。

恐る恐る背後を向くと、燃えるような赤毛の男が、剥き出しの殺意も隠さず僕を睨みつけていた。この男もすらりと背が高く、冷たく整った美形だ。

彼の切れ長の双眸は、僕に向けた刃と同じくらい鋭くて、物騒で……怖い。

「ま、待て! 違う! セスを攻撃するためにこんなことをしてるわけじゃないんだ!」

「黙れ!! おのれ、こんなところで魔術を使うとは……!! これは国家に対する反逆だぞ!!」

「だから違うって……!」

「落ち着きなさい、レナード」

すると今度は、もうひとつ落ち着いた男の声が聞こえてきた。

見上げると、四十歳前後らしい男が立っている。

胸元にはたくさんの勲章。

上がり眉とはつきりした二重まぶたが凛々しく、誠実そうな印象の男だ。

僕を前にして怯む様子もなく、泰然としている。……が、青白い光を湛えた短剣を僕に突きつけ

ているところは若い騎士と同じである。

年嵩^{としかき}の騎士は困惑丸出しの視線で僕を見つめたまま、静かな口調でこう言った。

「ノクト様、まずは落ち着いてください。これは上からの命令なのです、あなたの魔力が暴走したときは取り押さえよと」

「ぼ、僕は落ち着いてる！ だからその物騒なものを下げてくれ」

「まずはセスを離してやってください。刃を下ろすのはそれからです」

「わ……わかった」

もう一度セスを見上げると、白い頬が薔薇色^{ばらいろ}に染まっている。

いけない、身体を冷やしすぎて熱^{あつ}が出ているのかもしれない。

僕は慌てて、自らの手のひらに力を集めた。まずはこの氷を砕かなくては。

「セス、すまない。冷たいよな、すぐなんとかするから」

「う、ん……俺は大丈夫だよ。もうちよつとこのままでも……」

「何を呑気なことを！ すぐ離れるから、ちよつと我慢してくれ！」

刃を向けられながら必死で氷を砕こうと頑張るが、気が散ってその作業は捗^{はかど}らなかった。

にこにこ微笑みつつも、ときどき寒そうに震えるセスに抱きついて奮闘する僕を眺める騎士たちの視線は、氷に負けず劣らずとても冷たかった。



「私はダリオン・ガウス・オーグスタ。今回の魔獣封印隊の隊長を務めさせていただきます」

「……僕はノクト・ロラ・シャルダンだ。どうぞよろしく」

ぼそりと愛想なしにそう述べるも、年嵩^{としかき}の騎士、ダリオンは気を悪くするそぶりはない。

朗らかな口調で「よろしく。ではご説明いたします」と言い、明朗に微笑んだ。

ようやく氷を砕いたあと、僕は庭園^{おとよ}の東屋^{ひだりや}で任務の説明を聞いた。

今回の任務の同行者は、王宮騎士団の彼らだという。

王宮騎士団は、国王を守護する近衛騎士団に次ぐエリート集団だ。

王族が外遊する際警備にあたったり、危険度の高い魔獣が現れたときに派遣される部隊である。

彼らは、魔力の宿った剣や弓矢を使って魔獣と戦う。

平民から募った一般兵たちは触れることさえ許されない、高価かつ危険な武器を使うため、王宮

騎士団は特に厳しい訓練が課されている。

そうとうな武闘派集団だが、男爵家以上の子息しか王宮騎士団に所属できない。僕はそこに、少

しだけ引つ掛かりを覚えた。

僕と同じく孤児だったセスが、どうやって王宮騎士団に入れたのだろうか……

だが、ダリオンの説明を聞くうち、そんな懸念はあつという間に忘れ去ってしまった。

「こ、国外!? エルシャルオンの外に出られるのか……!?」

「ええ。行き先は、同盟関係にあるアルナディア王国です」

「アルナディア……!!」

彼らが同行する次の任務は、魔獣の封印。

しかも胸が躍ることに、僕にとってはじめての国外任務だ。

アルナディア王国はエルシャルオンより北にある小さな国。そこは険しい山々に囲まれた国土の三割が平地で、そこには近代的な街並みが築かれていると聞いたことがある。

機械産業がさかんで、さまざまな技術者が工房を構えて腕を振るっているらしい。

機械と光魔術を組み合わせた土産物が面白いことで有名で、かねてから一度訪れてみたいと夢想していた土地でもあった。

アルナディア王国は通称『光の国』とも呼ばれ、光属性の魔力を持つ魔術師たちがたくさんいる。

この国の夜を照らす魔法石は、すべてアルナディア王国から仕入れたものだ。

夜になると色とりどりの光に照らされて輝く噴水の仕掛けも、アルナディア王国の職人とエルシャルオンの魔術師たちが協働してつくりあげたものである。

僕は幽閉に近い状況で暮らすことを強いられているため、時折無性に新たな風景を見たくてたまらなくなる。自由に好きなところへ行きたくなる。

そんなことが許されるわけがないとわかっているからこそ、今回の国外任務には胸が躍った。

「アルナディアは我が国とは比べ物にならないほど人口が少なく、軍事力が高くはありません。その代わりに高度な機械技術と魔法でつくりあげられたからくりが王宮を守っているそうですよ」

「そ、そんなものがあるのか!? すごすぎる……!!」

城を守るからくりなんてものはエルシャルオンには存在しない。

どんな外観をしているのか、どれほどの大きさなのか、どのように動くのか、まるで想像もつかなかった。

そもそも僕は他国を自由に行き来することなどできない立場だ。任務なんてとつとと終えて、アルナディアの国の風景をじっくり見てまわりたいものである。

「面白そうだなあ。早く見てみたいね、セス」

「つ……ええ、そうですね」

ついわくわくしすぎて、隣に立つセスをパツと見上げた。

するとセスはやや驚いたように目を見張ったあと、花が咲くように微笑んだ。

その笑顔はあまりにも麗しいが、どことなく幼子をあやすような甘さが含まれていて、無邪気にはしゃぎすぎてしまった自分が恥ずかしくなった。

軽く咳払いをしてベンチに座り直し、僕は務めて冷静な声で「それで、今回の同行者があなた方、ということですか」と丁寧に問いかける。

「ええ。今回の任務は外交的な意味合いが強いので、我々王宮騎士団が同行いたします」